資料紹介

伝･黒笹 36 号窯跡出土の環耳付長頸瓶

小川 裕紀
（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）
大西 遼
（愛知県陶磁美術館 学芸員）

環耳付長頸瓶は肩部に半円状の耳を付けた長頸瓶で、猿投窯では須恵器や白瓷として生産されている。本稿では、令和元年度（2019 年度）に当館へ御寄贈いただいた作品について報告する。

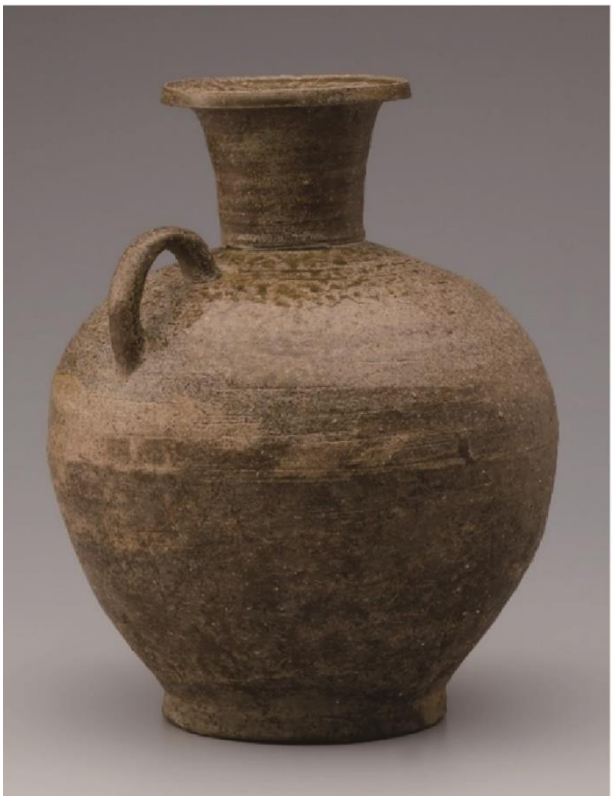
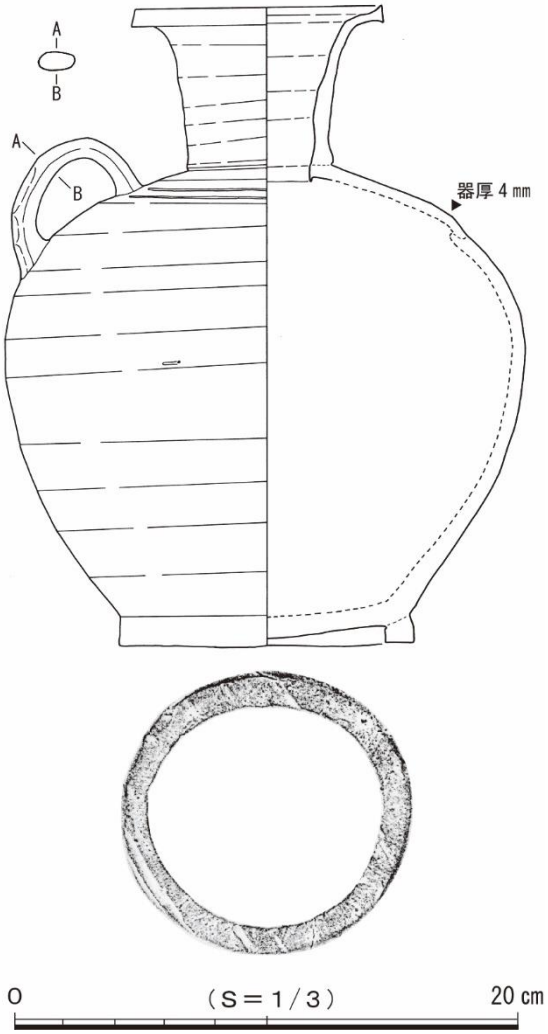
本器の法量は、高さ 25.5 ㎝、口径 9.6 ㎝、胴径 18.5cm、底径 11.1 ㎝である。長石混じりの素地土を用いて体部を球形に成形し、外反して開く口頸部及び半円状の環耳並びに断面台形状の高台を付けている。口頸部と肩部の接合は「三段構成」とみられる。器体はよく焼き締まって器肌は暗褐色を呈し、口頸部内外面から肩部にかけて暗緑色の灰釉層が形成されている。底面に焼き割れが生じ、口縁端部の一部に僅かな欠損があるほかは、完器である。現在の猿投窯編年では、O-10 号窯式（8 世紀末）に位置付けられる。

寄贈者である林きくえ氏によれば、本器は昭和 30 年（1955 年）頃、林鋤三郎氏（故人）が黒笹 36 号窯跡で採集したという。これは林家における伝聞情報であり、文字や地図などの記録類は存在しない。付属品としては、後代に制作された木箱が伴うのみである。管見の限り、これまでに展示公開、画像掲載歴が認められない。

黒笹 36 号窯跡は、みよし市莇生町小坂地内に所在した古窯跡である。本多静雄氏によれば、昭和 30 年 9 月に本窯跡より「灰釉多口瓶」（重要文化財）が出土したとされてきた。平成 18 年度（2006 年度）にみよし市遺跡調査会が発掘調査を行い、36-A・36-B・36-C の 3 基が検出され、8 世紀末を中心に操業したと推定されている。

本器は、平安時代初期の猿投窯における技術力の高さを示す優品であり、「灰釉多口瓶」と同じ窯跡より出土したとされる点で資料的な価値も高い。当館の根幹である猿投窯コレクションを充実させる重要資料であり、令和 2 年度から当館において展示紹介する予定である。なお、当館学芸課における管理番号は、陶磁･№7174 である。

本稿は本文を小川、実測図を大西が作成した。

参考文献

・本多静雄「須恵器長首子持壺」『陶説』49 号　1957 年 4 月
・みよし市立歴史民俗資料館『莇生地区多機能用地開発事業(第 I 地区)埋蔵文化財発掘調査報告書（K-36A･K-36B･K-36C･K-37･K-G-98)』みよし市教育委員会　2011 年 3 月
・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』愛知県　2015 年 3 月
・愛知県陶磁美術館学芸課『知られざる古代の名陶 猿投窯』(展覧会図録) 愛知県陶磁美術館　2018 年 6 月